広島大学附属福山中・高等学校
中等教育研究紀要　第40巻

情報化社会に対応する総合学習
－情報分析・プレゼンテーション能力の育成を目指して－

鵜木　　毅

従来の教科教育とは別に創設された総合学習は，教科教育との整合性をどのようにつけながら教育活動に位置付けられればよいであろうか。この問題に対し，筆者は，「情報化社会に生きる市民」に必要とされる能力の育成が総合学習において重要であると考えた。この情報化社会で必要とされる能力とは，他者の意見を批判的に分析できる能力であり，自らの意見を説得的に相手に伝える能力であろう。本年度，本校の総合学習の時間であるLIFEにおいて，こうした能力を育成するための授業に取り組んできた。授業内容は，意見を分析するための枠組み(ﾌﾚｰﾑﾜｰｸ)を習得することと，この枠組みを使って社会的論争問題（本年度は「夫婦別姓」の問題）について，他者の意見を分析したり，自らの意見を形成したりすることを中心に構成した。その授業の展開案の一部を提示する。

１．はじめに

総合学習の時間が導入されることになった。生徒や学校を取り巻く環境が大きく変化する中で，総合学習は「生きる力」の育成というキー・ワードに基づき，従来の教科の枠を超えた新しい教育活動の一領域として創設されたものである。この「生きる力」に関して，本校の社会科教室では，従来より「生きる力」を「生きて働く力」ととらえ，社会科の教科目標としてきた。そして社会科の教育内容としては，専門諸科学の成果に依拠しつつ，生徒が社会の諸事象及び諸事象間の関係を説明できるための概念的・説明的知識の修得に内容構成の基本をおいてきたのである。

これに対し，従来の教科教育の領域とは分離された総合学習では，教科教育との整合性をもたせるために，どのようにその目標を定めていけばよいであろうか。この問題について，筆者は，総合学習における一つの課題である，情報化社会への対応ということに着目し，総合学習の目標を，情報化社会に生きる市民に必要とされる能力の育成に設定することにした。以下，こうした目標に対応する総合学習はどのように内容構成されればよいか，その在り方を考察することにする。

２．情報化社会に必要とされる能力

情報化社会で生きる市民に要求される能力とはいかなるものであろうか。我々（生徒も含めて）の周りには，毎日，新聞や雑誌，ＴＶ報道などを通して様々な社会情報が伝えられ，我々はあふれるほどの情報にさらされている。こうしたメディアによって伝えられる意見を聞くと，我々はそれが「真実」であり，「正しいこと」であるかのように受け取りがちである。しかし，こうした情報の中には根拠のあいまいなもの，扇情的なものなど様々な情報が含まれている。こうした情報に惑わされないようにするには，情報の発信者がどのようなデータ（事実）に依拠し，それにどのような解釈を加えその意見を構成しているのか，そもそもその意見は確固としたデータに基づいているのであろうか，また解釈についても，そのデータからそうした解釈は成り立つのであろうか。生徒がこうした情報を批判的に分析し，自主的に評価・判断できるようになることが必要であろう。　さらに，将来社会で生活し，よりよい社会を形成するための市民の責任として，生徒は様々な社会問題に対する自分の意見を構成し，かつ自分の意見を他者に納得させることができるような，より説得力のある効果的な表現ができるプレゼンテーション能力の育成も必要であろう。そのためには，根拠となる事実をどのように選択しどのように提示すればよいのか，また，自分の主張を裏付けるためには，どのように論拠を補強すればよいのかどのような裏付けが有効であるのか，こうした説得性の高い主張を構成するための能力や効果的な表現能力などを生徒は磨かねばならないであろう。

こうした能力は，学習内容を重視する教科教育においては，時間的な制約もあって，育成することが難しいのが現状であろう。総合学習の時間はこうした教科教育の学習を互いに補完する時間として，生徒が与えられる情報に対して，それらを批判的に分析し，自主的・主体的に生きて行けるよう，自分の意見を形成することを主目的にすべきではないであろうか。以後，こうした総合学習の目的を達成するために，今年度中学校総合学習の時間「ＬＩＦＥ」において試みた実践の一部を紹介することにする。

3．年間指導案および概要

単　元　名	学習内容
(Ⅰ)意見の構造 ［2時間］	○一般に意見の構造は，D(データ)，W(解釈)，C(結論)，B(裏付け)という構成要素からなっている。 ［意見の構造］ D → C ↑ W ↑ B ・[D]というデータ(事実)がある。 ・そのデータは[W]というように解釈することができる。 ・それゆえ，[C]と結論づけることができる。 ・この意見の正当性は，[B]という事実によって裏付けることができる。
(Ⅱ)意見の分析① ［4時間］	○意見を分析してみる。 ・新聞などにある比較的単純な意見として，読者の「声」の欄や「天声人語」などを取り上げ，そこに主張されている意見を分析する。
(Ⅲ)意見の分析② ［6時間］	○論争的な社会問題を取り上げ，賛成・反対，両方の意見を分析する。 ・意見の分析の発展段階として，論争的な社会問題を取り上げ，その論争問題に対する賛成・反対両方の複数の意見を分析させる。 ・生徒は図書館その他の施設を利用し，書籍・雑誌・インターネットなどを活用しながら，情報を収集し，それに分析を加えながら，批判的に情報を吟味していく。 ・分析した意見を紹介し，評価する。
(Ⅳ)意見の構成 ［8時間］	○現代社会の論争的な社会問題について，意見を構成する。 ・社会の論争問題に対し，具体的な事実に依拠しながら，それに解釈を加え問題点と課題を明確にする。 ・この問題に対して，現在採られている方策(政策)を分析する。 ・現行制度に対する自らの意見を形成し，発表する。

単元(Ⅰ)「意見の構造」では，まず，意見の構造を提示する。一般に意見はデータ，解釈，裏付け，主張の四つの要素から構成されているおり，それぞれの要素を構造的に関係づけて説明する。次に，この構造化された四要素は意見分析の基本的な枠組み(フレームワーク)となるものである。ある意見について，どの部分がデータであり，どの部分が解釈であり，どの部分が裏付けであり，主張(結論)は何であるのかを分類し，それぞれについて批判的に検証することで，意見を分析することになることを説明する。この単元(Ⅰ)の目標は，この四要素から成る意見の構造を理解することである。

単元(Ⅱ)「意見の分析①」では，先の意見分析の枠組み(フレームワーク)を使い，比較的簡単な構造をもった短い意見を実際に分析してみる。今年度は中国新聞に掲載された読者の「声」の欄から，適当な意見を選び，生徒に分析させた。この新聞の「声」の欄に掲載された意見は日々の感想や雑感のようなものが中心である。それゆえ構造も比較的単純であるし，また精緻さにかけるところもある。生徒はこの教材となった意見をフレームワークを使って分析していく。この分析を進めるに従い，この意見のなかで結論とそれを導いたデータ(事実)やその解釈の整合性を問いかけ，データの不足を指摘したり解釈や裏付けの妥当性を吟味することになる。さらに，この意見をより説得的なものにしていこうとすると，この意見に不足しているデータを用意しなければならないことや，解釈を修正し，結論を手直ししなければならないことに気づくであろう。

生徒はフレームワークを使い，こうした意見の分析をすることを通して，いままで十分に吟味・検証することなく他者の意見を受け入れていた場合と比較し，他者の意見を批判的に分析することの重要性を認識することになるであろう。

単元(Ⅲ)「意見の分析②」では，前単元の練習を踏まえたうえで，より難しく，複雑な社会的論争問題を取りあげることにする。この単元の課題は，より専門的な文献資料における他者の主張を批判的に分析することと，賛否両論の論点を絞り込み，論点を的確に把握することである。具体的には「夫婦別姓」の問題を取り上げた。生徒にとっても自らの問題として考える価値のある問題であり，動機づけにも適していると考えたからである。

実際，この問題を調べるにあたり，生徒は新聞の縮刷版や新書などの他に，インターネットなどを活用して積極的に情報収集に取り組み，夫婦別姓についてのさまざまな観点からの意見に触れ，それらの意見を分析していた。

生徒には分析した意見について，夫婦別姓のもつ問題点もしくは，夫婦別姓にした場合の問題点について，まとめた上で発表させた。尚，まとめるにあたっては，論者が夫婦別姓に対して賛成／反対の主張をするにあたり，どのような事実を指摘し，それがどのように解釈されて，その結論が導き出されているかが明確になるよう留意させた。

単元(Ⅳ)「意見の構成」では，夫婦別姓の問題について，今までの意見を参考に，自分の意見を構成し，それを発表させた。これまでの学習から，生徒は，説得的な意見を構成するには的確で十分なデータを用意することの重要性を学び，解釈にあたり多様な観点が存在することを学んでいる。また，解決に向けては工夫のためのアイデアが必要であることも学んでいるであろう。自らの意見をまとめるにあたり，生徒には次のような指示を与えた。

(1) 現状（夫婦は一方の姓を名乗らねばならない）にはどのような問題点があるか。問題点が確かに問題であることをデータに基づいて論証すること。

(2) 現状に対する改革案を提示すること。この改革案については，実行可能な案であるか，問題点がこの改革案によって実際に解決できるのかを論証すること。

(3) 改革案導入によって想定される弊害があれば，それを指摘すること。その際に，改革案導入以前の問題の重要さと導入後の弊害の深刻さを比較すること。

以上の３点について配慮したうえで，レポートにまとめ，提出させた。

評価については，レポートの論理構成，論理の整合性，改革案に見られるアイデアの独自性や的確性などを基準のとして総合的に判断することにした。

４．学習展開

実際の授業の展開がわかるように，展開事例（単元Ⅱ）を提示する。

(1) 単元(Ⅱ)：他者の意見を分析してみよう

対象：1999年度中学３年生　生徒45名（男子33名，女子12名）

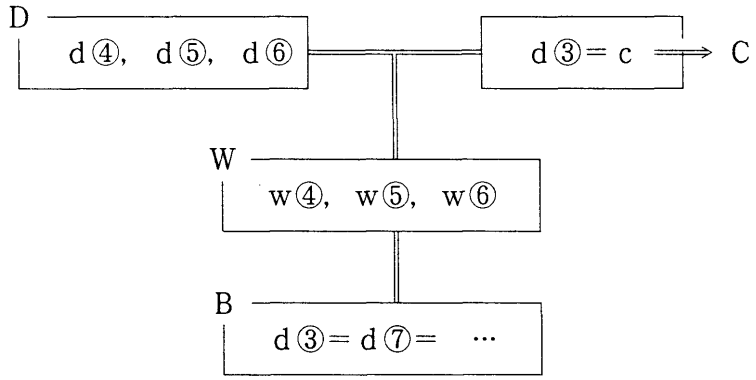
(2) 学習の目標・ねらい

新聞などにある比較的単純な構造の意見を分析することで，意見を構造的に分析することを学ぶ。

(3) 学習指導案

展　開	発　　問	学習過程	学　習　内　容
導　入	・意見の構造とはどのようものであったか。	・意見の構造を確認する。	・意見の構造は，「データ」，「解釈」，「結論」，「裏付け」より構成される。
展　開［１］	・資料の文献にある意見を分析してみよう。	・本時の課題を確認する。	
	・この論者の結論は何か。	・資料を調べる。	・日本の農業の先行きが心配である。
	・この資料にはどのような事実が述べられているか。	・資料を調べる。	・ｄ①筆者の友人からナシが届いた。 ｄ②友人は毎年ナシを送って来ている。 ｄ③友人は経営の規模を縮小する計画である。 ｄ④友人の家では，夫婦が高齢になった。 ｄ⑤友人の家では後継者がいない。 ｄ⑥友人の家では年寄りも年齢的に介護の必要な時期に来た。

			d⑦筆者の家でも農業経営の規模を縮小している。
展　開 ［2］	・提示された事実に対してどのような解釈が加えられて，結論に至ったのであろうか。意見を構造化してみよう。	・意見を構造化する。	
	・d④⑤⑥の事実からd③の事実が導き出されているが，それは正しいか。	・意見の正当性を吟味する。	・w④農業は重労働であり，高齢者には負担が重いと解釈され，それゆえに高齢になると農業経営の規模を縮小するというd③の結論は納得できる。 ・w⑤若い世代が農業に従事しないならば，w④の事実を補足する要因としてd③の結論は納得できる。 ・w⑥親の世代の高齢化が進み，その介護には時間と手間を取らることが予測され，これもw④の事実を補足する要因としてd③の結論は納得できる。
	・d⑦はこの意見の中でどのような機能を果たしているだろうか。	・d⑦の機能を確定する。	・筆者は友人についてのd④⑤⑥からd③に至る論理の正当性を述べているが，この一軒の農家が農業の経営規模を縮小しようとしている事実を踏まえて，日本の農業全体の危機を指摘している。この論理構造の中で，d⑦は帰納的にこの論理を裏付ける役割を果たしている。
	・分析に基づいて，筆者の意見を構造化してみよう	・意見を構造化する。	・家族経営をしている友人の農家は諸条件が重なって，経営規模を縮小せざるを得なくなっている。この事実は筆者においても該当することであり，おそらく日本の家族経営が中心の農家は同じような状況にあると推測される。よって日本農業の行く末が心配される。



展　開 ［3］	・筆者の意見を構造化した上で，この意見に対して吟味を加えてみよう。 ・この意見の構造に対して何か疑問があれば，その疑問を出してみよう。	・疑問点を指摘する。	（予想される疑問） ・Q1：d⑤について，本当に後継者は不足しているのだろうか。日曜農業などの例をTVで紹介していた。 ・Q2：日本の農家全体でこうした農業規模を縮小している農家はどれくらいあるのだろうか。危機といえるほど深刻なのだろうか。 ・Q3：個人経営の農家が農業経営の規模を縮小したからといって日本の食料事情にどれほどの影響があるだろうか。
展　開 ［4］	・自分の疑問を解決するにはどのようなデータが必要であろうか。	・必要な資料を調べる。	（例えばの資料） ・D1：日本の農業従事者の年齢構成やいわゆる日曜農業の実践例の数などのデータ ・D2：農地を合併したり，請け負い制度を導入したりしている例やその広がりなどのデータ ・D3：海外からの食料輸入の実績や穀物などの自給率の変化などのデータ
終　結	・意見を構造的に分析し，批判的に吟味しよう。		

5．おわりに

情報化社会に対応する総合学習の在り方として，生徒が，受信する情報を批判的に処理でき，また説得的な意見を発信できる能力を育成することが重要であると考える。今回，意見を分析する枠組みとして，事実－解釈－結論－裏付けの四つの要素を構造的に結び付けたフレームワークを生徒に提示し，生徒はこのフレームワークを使って意見を分析したり，自らの意見を構成したりした。このフレームワークはディベートなどの盛んなアメリカでは一般的なものであるが，日本では日常的に意識されて使われているものではない。しかし，国際化というテーマが一方で課せられている状況で，情緒に訴える議論ではなく，論理に訴える議論のできる能力こそを育成しなければならないであろう。今回の実践報告も，暗中模索をしながら最初の試案程度の試行である。今後とも，批判的な思考力の育成に，より効果的な授業・教材の開発に努めていきたいと考えている。